

「大雄宝殿」考

二階堂 善 弘

On “Daxiong Baodian (大雄宝殿)”

NIKAIDO Yoshihiro

Buddhist temples of Mainland China, main hall is called “Daxiong Baodian (大雄宝殿)”. But in Japan called “Butsu-den (仏殿)” or “Hong-den (本殿)”, in Korea called “Dae wung jeon (大雄殿)”. According to my understanding, “Daxiong Baodian” began to be used from the time of the Ming Dynasty. Reference to some cases, I consider name of main halls of Buddhist temples.

Keywords: Buddhist temples, Daxiong Baodian (大雄宝殿), Hong-den (本殿),
Dae wung jeon (大雄殿)

前 言

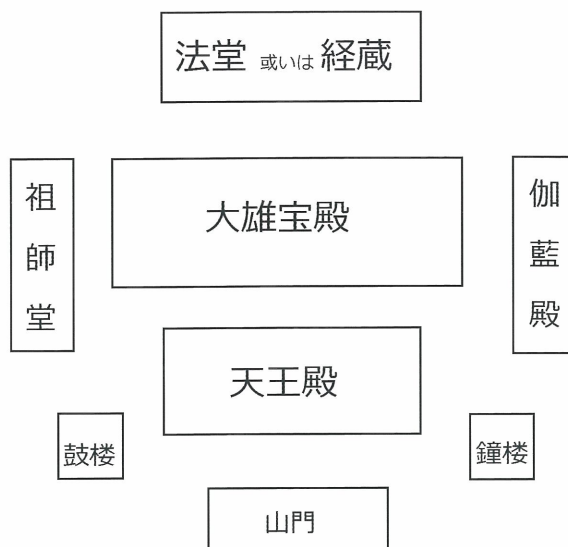
中国の寺院を訪れると、日本の寺院と伽藍構造がかなり異なることに気がつく。たとえば、中国では中心になる建物は「たいゆうほうでん大雄宝殿」と呼ばれ、その前に四天王と韋駄天などが配される「天王殿」がある。「大雄」はまた「だいおう」と読むこともある。その手前に山門（三門）があるが、日本ではよく見る仁王は、中国の寺院では見ることが少ない。たまに仁王に類した像も置かれているが、「哼哈二将」「金剛力士」と称されることが多い。

本殿のところを大雄宝殿と呼ぶのは、ベトナムの寺院でもよく見かける。また東南アジア各地の華人系寺院においても仏殿や本殿はそう呼ばれることが多い。大雄宝殿とは、アジア一帯に広がる呼称とみてよい。しかし、韓国では「大雄殿」の方が一般的である。また日本では黄檗宗寺院の大半で本殿を「大雄宝殿」と称する一方で、他の宗派ではこの名称を見ることは少ない。本論では、アジアにおける大雄宝殿という呼称の一般化の経緯について検討してみたい。

1. 伽藍構造の実際

中国の寺院においては、正面から山門・天王殿・大雄宝殿が直線的に並び、天王殿の前には鐘楼・鼓

楼、脇には祖師堂・伽藍殿、また大雄宝殿の後ろには法堂や経蔵などが配されるという伽藍構造が一般的であると考えられる。



一般的な伽藍配置（特定の寺院ではない）

むろん、これはかなり単純化したものであり、実際の多くの寺院はこれとは異なる構造を有する。

たとえば杭州の靈隠寺^{りんいんじ}であれば、天王殿、大雄宝殿、薬師殿、法堂、華嚴殿が中心線上に並び、両脇には五百羅漢堂、濟公殿、大悲楼、方丈などが備わっている。浄慈寺^{じんずじ}では、山門、大雄宝殿、後殿という配置である。



寧波阿育王寺天王殿

寧波の阿育王寺^{あいおう}では、山門、放生池、天王殿、大雄宝殿、舍利殿、法堂と蔵経楼となっており、左右には祖師殿、方丈、鐘楼などがある。天童寺は、天王殿、仏殿、法堂、先覚堂、羅漢堂とあり、左右に玉仏殿や鐘楼、それに伽藍殿がある。天童寺では「大雄宝殿」とは呼ばず「仏殿」と称している。

アモイの南普陀寺は、天王殿、大雄宝殿、大悲殿、法堂という構造になっている。大悲殿は観音菩薩を祀る殿であるが、これを大雄宝殿の前後に建てることも多い。観音菩薩を祀る殿は、大悲殿のほか「円

通殿」「観音殿」「円通宝殿」と呼ばれる場合もある。靈隠寺の近くにある天竺三寺、すなわち上天竺寺、中天竺寺、下天竺寺はいずれも観音祭祀を中心とする寺院であるが、そのなかでも中天竺寺の主殿は円通殿である。観音を本尊とする寺院においては、大雄宝殿が存在せず、円通殿が主殿であることも多い。

またたとえば上海の寺院であれば、玉仏寺は天王殿、大雄宝殿、方丈、玉仏楼、三聖殿となる。同じく上海の龍華寺では、手前に龍華塔、弥勒殿、天王殿、大雄宝殿、三聖殿、方丈、蔵経楼となる。鎮江の金山寺（江天禪寺）のように、山の斜面に建てられている場合は直線の配置が難しいが、それでも山門と大雄宝殿は並んで建っている。



鎮江金山寺大雄宝殿

日本でも、黄檗宗の寺院のほとんどは大雄宝殿を持つ。明代の寺院構造を取り入れているためである。京都宇治の萬福寺は、総門を入ると三門があり、さらに天王殿、大雄宝殿、法堂と続く構造である。両側には祖師堂と伽藍堂があり、また鼓楼、東方丈、西方丈がある。



宇治萬福寺大雄宝殿

これはベトナムなど、東南アジア地域の寺院、或いはタイやシンガポールなどの華人系の寺院でも同じである。もっともベトナムの寺院の場合は、本殿が呼称される場合もあるが、別に中心となる神仏を祭祀するところを大雄宝殿と称する場合もある。ベトナムのフエの報国寺を訪問したときは、本堂の上部に大雄宝殿の額が飾られていた。



フエ報国寺本堂

宇治萬福寺は17世紀後半、江戸時代の寛文年間に当時の福建の福清の萬福寺を模して造られた。ベトナムのフエにおける諸寺は、広南阮氏によってやはり16世紀から17世紀にかけて造られている¹⁾。この頃は中国本土では大雄宝殿の名称がすでに定着しており、それが模されたものであると考えられる。

大雄宝殿の前に位置する天王殿の構造については、かつて論じたことがある²⁾。天王殿には、中心正面に弥勒仏、その裏に韋馱天、そして脇には持国天・増長天・広目天・多聞天の四天王を配するのが一般的である。この四天王の持ち物は、持国天が琵琶、増長天が宝剣、広目天が蛇或いは龍、多聞天が傘であり、日本の四天王と著しく異なる。そもそも、天王殿という形式も、日本では黄檗宗寺院を除いてはほとんど見ないものである。

2. 日本・韓国との比較

日本の寺院の場合、本殿にあたる建物の呼称は様々である。法隆寺、唐招提寺、薬師寺、東寺などのように「金堂」と称することもあれば、泉涌寺、建長寺、東福寺などのように「仏殿」と称することもある。法堂と仏殿を兼ねている場合も多い。比叡山延暦寺では「根本中堂」が総本堂とされる。

建長寺や建仁寺などのいわゆる「五山」は、13世紀から14世紀にかけて、中国の南宋の五山寺院を模す形で整備されていった³⁾。五山には含まれないが、京都の泉涌寺も同様に南宋からの影響で建てられている⁴⁾。もし当時の中国寺院の本堂が大雄宝殿という呼称であるとすれば、日本でもまたそのように称していたはずである。恐らく当時の五山を中心とする中国の寺院も、本堂は「仏殿」と称していたと考えられる。

1) ファン・タイン・ハイ著、西村昌也訳「フエ文化と中部ベトナム文化形成過程における広南阮氏の首府」(関西大学文化交渉学研究拠点『周縁の文化交渉学シリーズ7 フエ地域の歴史と文化—周辺集落と外からの視点—』2012年) 503頁

2) 筆者『明清期における武神と神仙の発展』(関西大学出版部 2009年) 155~171頁

3) 島尾新編・小島毅監修『東アジアのなかの五山文化』(東京大学出版会 2014年) 78~94頁

4) 箱崎和久「泉涌寺伽藍にみる南宋建築文化」(『日本と《宋元》の邂逅』勉誠出版 2009年) 54~63頁

これを証するのは『五山十刹図』である。南宋の五山諸寺院、すなわち徑山寺^{きんざん}、靈隠寺、浄慈寺、天童寺などの状況を描いたものである。ここには靈隠寺、天童寺、さらに鎮江の金山寺などの図が載せられているが、すべて本殿は「仏殿」と呼称されている⁵⁾。

非常に単純化した話となるが、日本の禅宗系寺院で本殿を仏殿と称するのは、当時の中国の禅宗寺院の呼称をそのまま取り入れたものであると考えられる。また黄檗宗寺院で大雄宝殿と称するのは、その当時の呼称を取り入れたものである。いま鶴見の総持寺の仏殿は正面に「大雄宝殿」と書かれているが、これは黄檗宗の影響によるものと考えられる。

また韓国の諸寺院は、先に見たように本殿などを「大雄殿」と称することが多い。



釜山梵魚寺大雄殿

たとえばソウルの奉恩寺^{ボンウンサ}では、真如門、法王楼、大雄殿、地藏殿、北極殿、弥勒殿、板殿などから成る構成である。必ずしもこれらは直線的には並んでいない。釜山^{プサン}の梵魚寺^{ボモサ}では、入り口の一柱門のあとは、天王門、大雄殿と続き、また弥勒殿、観音殿、毘盧殿、羅漢殿などがあつた。智異山^{チリサン}華嚴寺では、金剛門、天王門、普濟楼、大雄殿、覚皇殿、冥府殿、円通殿となっていた。

天王門に四天王、大雄殿に釈迦を祀るということは、韓国と中国でほぼ同じく行われている。四天王の持ち物も、琵琶・宝剣・龍または蛇であることは同じである。ただ、韓国の多聞天は宝塔を持つことが多く、傘でないこともある。これはやや古い形を残すものと考えられる。

また華嚴寺にある「覚皇殿」は、やはり本殿の機能を持つものと考えられる。日本でも、博多^{じょうてん}の承天寺の本殿は覚皇殿である。永平寺にも仏殿の別称として「覚皇宝殿」がある。

5) 張十慶『五山十刹図与南宋江南禅寺』（東南大学出版社 2000年）114～120頁



博多承天寺覚皇殿

中国においても、本殿を覚皇殿とするところは四川の明教寺などがある。そもそも杭州の靈隱寺も本殿はかつて覚皇殿と称していた。『武林梵志』巻五には次のような記載がある。

元至大元年、僧慈照重修覚皇殿。至正間燬、國初重建、改靈隱寺。宣徳間、僧曇續建三門面壁軒。良玠建佛殿、殿中有拜石、長丈餘、有花卉鱗甲之文、工巧如畫。正統間、珖理建直指堂、堂扁張即之書。舊有百尺彌勒閣、蓮峰堂、千佛殿、延賓水閣、望海閣、巢雲亭、見山亭白雲菴、松源菴、及宋理宗御書覺王寶殿妙莊嚴域、並廢⁶⁾。

これによれば、元の時代、靈隱寺の本殿は覚皇殿と称していたことがわかる。13世紀から14世紀の寺院では、このように称する寺院も多かったと考えられる。韓国や日本の寺院に幾つか残る覚皇殿も、恐らくこの影響下にあつての名称と推察される。

3. 名称の推移について

このように「仏殿」「覚皇殿」「大雄殿」「大雄宝殿」は、時代と地域に応じて変化していったものと考えられる。ただ、その変遷は統一的ではなく、地域ごと、寺院ごとに異なるものであったと考えられる。そのために、時に覚皇殿などの称も残ったものであろう。

「大雄」も「覚皇」も、そもそも仏陀の名号のひとつである。「覚皇」は「覚王」とすることもある。『法華経』には、次の表現がみられる。

大雄猛世尊 諸釋之法王
哀愍我等故 而賜佛音聲

6) 趙一新編『武林梵志』(杭州出版社 2006年) 117頁

若知我深心 見爲授記者⁷⁾

また覚皇については、『密跡力士大権神王経偈頌』に次のような表現がある。

今逢大覺尊 廣開方便門
鍍梓施梵書 遍布不全壁
未至逡巡間 遐邇八分足
皆是正遍祐 覺皇慈悲力⁸⁾

いずれにせよ、釈迦牟尼仏の号のひとつである。そのため大雄殿とは「釈迦仏を祀る殿」とされてきた。その解釈自体は問題ないが、実際には釈迦仏以外の仏を祀る大雄宝殿も少なからずある。よく見かけるのが、燃灯仏・釈迦仏・弥勒仏の三世仏、或いは阿弥陀仏・釈迦仏・薬師仏の三聖を祀る寺院である。また大雄宝殿に五方仏を祀り、なかに全く釈迦仏を含まない寺院もある。これは本来の意味からはずれが生じている。

大雄宝殿については、『水滸伝』容与堂本第84回には次のような記載がある。

他兩個若入的城中、自有去處。時遷曾獻計道、薊州城有一座大寺、喚做寶嚴寺。廊下有法輪寶藏、中間大雄寶殿、前有一座寶塔⁹⁾。

この記載では寺院の構造はわかりにくい。一方で『三宝太監西洋記』第2回には次のような記載がある。

只見百步之内、就有一座摩阿古刹、前面一個山門、矮矮小小。次二一個天王殿、兩邊列著各風・調・雨・順、盡有些雄壯。次二一個金剛殿、前後坐著個國泰民安、越顯得威風。到了大雄寶殿之上、三尊古佛、坐獅、坐象、坐蓮花。略略的轉東、另有一所羅漢殿、中間有五百尊羅漢、每尊約有數丈高。寺前面有個孤峰挺立、秀削芙蓉。峰頭上一個峻嶒古塔、不記朝代¹⁰⁾。

ここで言及される寺院は杭州の浄慈寺である。この記載が書かれたのは明の末頃であり、当時の浄慈寺は天王殿、金剛殿、大雄宝殿、羅漢殿という構造を有していたのが判明する。

『浄慈寺志』においては、金剛殿と天王殿について次のような記載がある。

7) 鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』（『大正大蔵経』巻9 No. 0262）21頁a段、なお本論の仏典のデータについては、「大正大蔵経データベース SAT」（<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>）によって検索を行っている。

8) 『密跡力士大権神王経偈頌』（『大正大蔵経』巻32 No. 1688）777頁c段

9) 『容与堂本水滸伝』（上海古籍出版社 1988年）1231頁。なおこれらのデータ検索については、関西大学アジア文化研究センター所蔵の『中国基本古籍庫』などを用いている。

10) 『三宝太監西洋記通俗演義』（上海古籍出版社 1985年）24頁

浄慈寺舊志、金剛殿三楹、為寺三門、顯徳元年建。中龕彌勒佛銅像一尊、後繪韋馱像一尊、左右兩壁繪靈山、淨土二會、塑執金剛神二尊、紹興初燬。咸淳間、住持文寶復建。洪武癸亥又燬。宣徳七年、住持宗妙、化主普安、同建。浮慈寺新志、天王殿、康熙十一年督憲劍公倡建。内有石爐一座、元至治二年八月供。天王殿彌勒佛前石香爐¹¹⁾。

またこれに続いて本殿の記録があるが、ここでは「大雄宝殿」の呼称ではなく「大雄殿」とあり、次のように記す。

大雄殿五楹、高十三丈、即浄慈正殿也。飛檐、鳴尾、藻井、虹梁、結構莊嚴、氣象閎偉。中奉大如來像三身、青螺紺目、趺坐寶蓮、金色晃耀、焰網騰煜、妙相無比。迦葉、阿難立侍左右。梵王、帝釋旁列其前。又十地菩薩暨十八諸天、周繞拱衛。俱相好殊特、妙麗光明。瞻仰肅敬。其北壁則補陀大士躡鼈首、翔立巨浪中、神觀如生、慈威具足。殿自周顯徳元年、吳越忠懿王錢俶建。宋紹興初燬、至九年高宗復建。未幾又燬、孝宗賜金成之。嘉泰四年又燬、嘉定十三年寧宗勅住持妙崧復建。至元庚寅又燬。住持至慧復建。洪武癸亥二十五年閏十二月、又燬、蔡德銘力募復。逮永樂八年、住持德純相繼成之。正統丁巳年、又燬。住持宗妙、東明、慧昂同建¹²⁾。

金剛殿が建てられた顯徳年間、周の世宗が「三武一宗の法難」の最後にあたる排仏を行った時期に当たる。そのためこの時期の建造は、やや奇異な感があるが、杭州は当時吳越王の支配下にあったため、排仏の影響は少なかったのではないかと推察される。この記載からは年代ごとの推移はわかりにくい、金剛殿が先にあり、その後天王殿に変わっていったのではないかと考えられる。

大雄殿は吳越の時期に建てられ、その後何度も火災に遭っているようで、しばしば再建されている。この記載からは、釈迦如来、阿難・迦葉の像、それに梵天と帝釈天に十八諸天を足して二十諸天の像が祭祀されていることがわかる。殿の称呼は大雄殿であろうが、一貫して明代までずっとそうだったのかについては不明である。

明の葛寅亮の撰になる『金陵梵刹志』には、能仁寺について次のような記載がある。

南唐昇元中、改興慈院。開寶中又廢。太平興國間、更建改承天寺。宋政和中、改能仁禪寺、建炎中兵燬。慶元間重修。又縣志謂能仁寺、即昇元寺舊址。國初寺災。洪武戊辰改建今地。嘉靖初、復災。萬曆間重修。山門、金剛殿、暨大雄殿、亦增丹彩、然終不能復初制¹³⁾。

ここでも「金剛殿」と「大雄殿」という構造が書かれている。

そもそも『金陵梵刹志』の記載においても、圧倒的に多いのは「仏殿」である。「大雄殿」はそれに次

11) 趙一新編『浄慈寺志』(杭州出版社 2006年) 34頁

12) 前掲趙一新編『浄慈寺志』 35~36頁

13) 葛寅亮『金陵梵刹志』(天津人民出版社 2007年) 495頁

ぎ、かつ「大雄宝殿」の呼称はひとつも見えない。また「金剛殿」と「天王殿」は並置されていることが多い。元代から明代にかけて、「仏殿」から「大雄殿」、それに「大雄宝殿」への名称の変更は、徐々に各地で進んでいったのではないだろうか。

4. 古式構造を残す寺院

山門、天王殿、大雄宝殿という構造と異なる伽藍を有する寺院も数多くある。古くからの建築を残している場合もあれば、新しい建物でも旧来の構造を引き継いでいる場合もある。いずれにせよ、別の構造を知る手がかりとなる。

四川大足の聖寿寺は、天王殿がなく、代わりに「帝釈殿」がある。その後方に大雄宝殿があるが、さらに円通殿、薬師殿、維摩殿、財神殿、子孫殿とあった。重慶の龍頭寺では、三門、観音殿、燃灯殿、念仏殿という構造で、天王殿も大雄宝殿もない。これらの寺院は、古い層の構造を残すものではないかと考えられる。



重慶龍頭寺燃灯殿

山西には、遼・金代の殿宇をそのまま残す寺院が少なからず存在している。大同の華嚴寺、善化寺、平遙の鎮国寺、双林寺などである。さらに古いものとして、唐代の遺構を残す五台県の南禅寺、仏光寺なども知られている。南禅寺の主殿は「大仏殿」、仏光寺の主殿は「大殿」となっている。また義県の奉国寺も古刹であるが、こちらは「大雄殿」となっている。

双林寺は、天王殿、釈迦殿、武聖殿、大雄宝殿、千仏殿、菩薩殿、娘娘殿という構造になっている。ただ大雄宝殿は明初に作られたものである。本来は釈迦殿の方が主殿であったと考えられる。

鎮国寺は、天王殿、万仏殿、三仏楼という構造になっている。万仏殿は五代北漢の建物である。この時期は、大雄殿という呼称はなかったと考えられる。

善化寺は、天王殿、三聖殿、大雄宝殿、普賢閣という組み合わせになっている。また華嚴寺は、上華嚴寺と下華嚴寺の二つに分かれているが、大雄宝殿のあるのは上華嚴寺の方である。善化寺も華嚴寺も、遼代の建築を残すものであるから、或いは大雄宝殿の名称も遼・金代から普遍的であったかと思われるが、ちである。



平遙鎮国寺万仏殿

しかし曹臣明氏の指摘によれば、華嚴寺の本殿の名称は「九間大殿」であったようであり、かつ祀られる如来も毘盧舎那仏、阿闍仏、阿弥陀仏、成就仏、宝生仏であるとされる¹⁴⁾。五方仏であり、釈迦如来が含まれない。

善化寺もほぼ同様であり、張明遠氏の指摘によれば、金代の記録にはただ「大殿」と書かれるのみである¹⁵⁾。こちらも祀られているのは五方仏である。恐らく、華嚴寺・善化寺ともに、大殿は遼代の建築を遺すとはいえ、大雄宝殿という名称に改められたのは、明代になってからのことと推察される。そのため、五方仏を祀っているのに、呼称は「大雄宝殿」という齟齬が生じてしまったものと考えられる。

結 語

以上、「大雄宝殿」の呼称を主として実例に基づいて検討したが、明代において使われ始め、明末には一般化していたという可能性を指摘するのみとなった。今後はもう少し詳細な検討が必要となろう。

実際にデータベースを検索しても、元以前においては大雄宝殿という名称はほとんど見られず、明代のある時期からしか使われていないようである。一方で大雄殿はもう少し早い。それ以前の時期には、覚皇殿の名称も使われていたようである。ただ、覚皇殿の事例は大雄殿に比べるとはるかに少ない。

14) 曹臣明「大同華嚴寺的歴史変遷」(『山西大同大学学报・社会科学版』第26卷2期 2012年) 35～42頁

15) 張明遠「善化寺五方仏塑像的創建年代及其相關問題研究」(『敦煌研究』2009年4期) 55～66頁